

和楽器ユニットおとぎ 風雅草紙コンサート in 奈良

【演目紹介】 2019年(令和元年)5月6日 学園前ホール

《 第一部 》

一. 「四人の律動」 作曲:木場大輔

本日のオープニングは、2016年初演のオリジナル曲です。

無機質で機械的なビートを四つの和楽器が刻み、その反復の中で個性豊かなそれぞれの音色が次第に露出してゆく。ミニマルミュージックやロックの手法を取り込むことで、小編成ながらもとりわけ個性的な音色の和楽器が揃った「おとぎ」の楽器編成の面白さを浮き彫りにしたい。(木場大輔)

二. 「朧月夜」 作曲:岡野貞一 / 編曲:木場大輔

言わずと知れた童謡の名曲を、和楽器ならではのアンサンブルでお聴き下さい。尺八と十七絃箏のやわらかい音色が、一面の菜の花と月夜の風情を醸し出します。

三. 「二管の譜」 作曲:初代山本邦山

都山流尺八の第一人者だった山本邦山(1937～2014)は、古典尺八の奏法をふんだんに盛り込んだ斬新な作品を多数遺しました。

本日は、1975年に作曲された二重奏を、折本と安田の演奏でお聴き頂きます。

【以下 作曲者解説より抜粋】

独奏と合奏を交互に組み合わせ、一楽章形式の二重奏曲。一貫した伝統的な旋律のもと、時折でてくる不協和音は、古典本曲にある強烈な「ムライキ」や不安定な響きを匂わせるために書いた。ソロ部分は、演奏家の自由な演出を期待している。

四. 組曲「壽ぎ」～につぽん祝い歌～ 編曲:木場大輔

本日初演の新作です。日本各地の伝統的な祝い歌をモチーフに、全五楽章からなる組曲に仕上げました。新時代の幕開けを、皆様と一緒に寿ぎましょう!(⇒詳しい解説は裏面へ)

《 第二部 》

五. 語りと和楽器による音楽劇『つう』～夕鶴より～

—乙女文楽と共に—

脚本・演奏:おとぎ(原脚本:吹田芸術協会 長田正雄) / メインテーマ他 作・編曲:木場大輔

乙女文楽:桐竹繭紗也(客演) / 語り:安田知博 / 琵琶語り:川村旭芳

夕鶴のお話をもとにした本作品は2003年、吹田芸術協会主催による公演「第4回九十九物語」にてオリジナル版が上演され、本日のゲスト・桐竹繭紗也さんと、琵琶の川村旭芳が共演いたしました。初演時の脚本・演出を手掛けられた長田正雄氏の力添えも得て、おとぎ版として新しく生まれ変わり、2017年の京都公演にて上演。おかげさまで好評を頂き、二年ぶりに奈良の地で再演いたします。乙女文楽&おとぎのコラボレーションを、どうぞお楽しみ下さい。

【お詫び】 チラシ掲載の、組曲「月と大地の記憶～シルクロードの旅人～」は、公演時間の都合上、カットすることとなりました。何とぞご了承くださいませ。

◆ 組曲「^{ことほ}壽ぎ」～にっぽん祝い歌～ 編曲:木場大輔

祝いの場に欠かせない祝い歌。地元共同体の皆で唱和する歌(I.III.V)と、半職能的な芸能者が「マレビト」として訪れ祝福する歌(II.IV)を基に、器楽の組曲として構成した。選曲にあたり、次の二点を重視した。なるべく、レコードやマスメディアによらず口伝えによって広まり受け継がれた伝統的な祝い歌であること。地域に深く浸透している、または他地域・他芸能に大きな影響を及ぼした歌であること。有名民謡だけではない、にっぽんの祝い歌の豊穡な世界に、新時代を迎え今一度、脚光をあてたい。(木場大輔)

I. 「めでた」 岐阜県民謡(高山市)「めでた」より

飛騨高山での宴席に欠かせない祝い歌。この歌が唱和されるまでは自席から立ち歩くことが許されないという。

尺八が奏でる無拍節の主旋律を、雅楽やインド音楽の手法を取り入れた、胡弓の持続音や、琵琶と十七絃箏の分散和音が彩る。

II. 「萬歳」 愛知県民謡(知多市)「御殿万歳」より

ポンと鼓を打って正月を寿ぐ万歳は、千秋万歳を演じる京の陰陽師が豊臣秀吉により尾張・三河に追放されたことから両地で発展したという。特に尾張万歳はやがてこんにちの漫才のルーツにもなった。ここでは尾張万歳の代表的な演目、御殿万歳を取り上げた。

前半は「柱立て」、後半は「七福神囃子」と呼ばれる。

胡弓が奏でる主旋律をもとに、次第に躍動的に全体のアンサンブルが展開する。

III. 「まだら」 石川県民謡(七尾市)「まだら」より

玄界灘の馬渡島(まだらとう)の古民謡が船乗りによって北陸に伝わり、石川県の七尾、輪島ほか福井県や富山県で祝い唄として根付いたもの。

「めでためでたの若松様よ 枝も栄ゆる葉も茂る」の歌詞を、厳格な手もみの手拍子を伴いつつ、五分前後かけて歌う。

大らかなリズムに胡弓の旋律と尺八のハーモニーを乗せ、バレエ曲「ボレロ」のような反復の心地よさと雄大さを意識した。

IV. 「大黒舞」 鳥取県民謡(鳥取市)「円通寺大黒舞」より

鳥取市円通寺に江戸時代から伝わる円通寺人形芝居は、歌と三味線、胡弓、太鼓に合わせ三人遣いの人形を操り、農閑期に諸国を巡業した。大黒舞はそのレパートリーのひとつ。

躍動的なリズムにのせ、各楽器の短い独奏をはさみつつ展開する。

V. 「エイヨーエ」 福岡県民謡(福岡市)「祝い目出度」より

博多のハレの舞台に欠かせない祝い歌で、博多祇園山笠で歌われるほか、会合や宴席は「祝い目出度」の唱和に続き「博多手一本」で締めるのが通例とされる。

本組曲の中では比較的知られた歌だろう。

中盤、歌の旋律を発展させた琵琶と十七絃箏のスリングな掛合いが聴きどころ。

終曲部分は手一本の掛け声とリズムを基にしている。博多では手一本のあとの拍手は不作法とされているそうだが、本作ではあくまで楽器による旋律なので、演奏が決まった時には、遠慮なく拍手を送って頂きたい。